

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | イタリア語sembrareとフランス語semblerにおける非人称用法 : 認識動詞との類似性を通じて |
| Author(s) | 上野, 貴史 |
| Citation | 言語文化学会論集 , 56 : 61 - 85 |
| Issue Date | 2021-07 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052214 |
| Right | Copyright (c) 2021 言語文化学会 |
| Relation | |



イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における非人称用法

— 認識動詞との類似性を通じて —

上野 貴史 (広島大学)

1. はじめに

イタリア語(*It.*) *sembrare* とフランス語(*Fr.*) *sembler* には、自動詞用法と非人称用法という二つの用法があり、それぞれの用法において異なる構造を持つ。上野(2020b)では、これらの動詞に後続する属詞を数量的に調査することにより、両言語の構造上の類似点・相違点の考察を行っている。この中で、非人称用法に関して、イタリア語・フランス語共に非定形節よりも定形節が多く使用されるという共通点がある一方で¹⁾、定形節内の構造と経験者(Experiencer)である与格(dative)の出現において両言語では異なる様相を呈することを指摘している。

非人称用法における定形節内の構造については、フランス語では(1a)のような *être* を用いる繫辞文でなく(1b)のような動詞文がイタリア語よりも多く現れる²⁾。

(1) a. ..., il *me* **semble** que vous êtes libre,... (*Corpatext*⁴⁾)

EXP mCDat seemPres.3Sg that you bCPres 2Pl free

「あなたは自由であると私には思える」

b. ...et il *me* **semblait** que cette eau glissait de gauche à droite,... (*Corpatext*)

and EXP mCDat seemPastImp.3Sg that his water slidePastImp.3Sg from left to right

「そして私にはこの水が左から右へゆっくりと流れているように思えた」

定形節内における繫辞文と動詞文は、(2)のような不定詞を属詞とする自動詞用法として

*1 その割合はほぼ2(非定形節)：8(定形節)となる。

*2 イタリア語においては定形節内に78.7%の割合で動詞文が出現するのに対して、フランス語では86.9%の動詞文が確認される(上野 2020b)。

*3 本稿で使用する略号は次の通り。N：名詞、A：形容詞、V：動詞、P：前置詞、Adv：副詞、D：決定詞、CL：接語、1：一人称、2：二人称、3：三人称、Sg：単数、Pl：複数、Nom：主格、Acc：対格、Dat：与格、Subj：接続法、Cond：条件法、Pres：現在形、Fut：未来形、PastImp：半過去形、PastRem：遠過去、PastSimp：単純過去、Inf：不定詞、PastP：過去分詞、EXP：虚辞代名詞、QM：疑問マーカー。

*4 フランス語に関しては、*Lextutor French Corpus* をコーパスとして使用している。このコーパスにおける書き言葉としては、"*Le Monde*", "*Ecrit*", "*Corpatext*"のサブコーパスがある。

書き換えることによりその構造的な相違がより浮き彫りとなる。

(2) a. vous *me* **semblez** (être) libre

b. cette eau *me* **semblait** glisser de gauche à droite

定形節内が繫辞文の場合は、(2a)で示したように、*sembler* が不定詞 *être* を属詞として取ることになるが、この *être* は小節 (small clause) 主語と述語の一致を行うための繫辞であり、自動詞用法においては省略することが可能である。従って、このような場合、*sembler* は属詞として不定詞ではなく AP である *libre* を取っているに過ぎないということになる。つまり、(2a)と同じ構造となる(1a)のような定形節内に繫辞文を出現させる構造は、*sembler* が属詞として DP/AP/PP を取り、*sembler* 自身が繫辞的に使用されていると考えることが可能である。一方、定形節内の動詞文の書き換えである(2b)は、*sembler* の属詞として省略のできない不定詞を主要部とする VP が後続し、*sembler* も繫辞ではなく動詞として機能している。このように、フランス語がイタリア語よりも定形節内に動詞文を多用することから、上野(2020b)ではフランス語 *sembler* がイタリア語 *sembrare* より動詞性 (verbness) が強いという指摘を行っている。

また、定形節の非人称用法における与格の出現に関しては、フランス語 *sembler* では(3a)のような与格を伴う構造が多く出現するのに対し、イタリア語 *sembrare* では(3b)のような与格を伴わない構造が多く出現する*。

(3) a. Fr.: ; il *me* **sembla** que le jour se levait! (*Corpatext*)

EXP mCDat seemPastSimp.3Sg that the day se raisePastImp.3Sg

「太陽が昇っていたように私には思えたんだよ」

b. It.: **Sembrava** che le campane della città sonassero per loro,... (*NARRAT**6)

seemPastImp.3Sg that the bell of.the city ringSubj.PastImp.3Pl for them

「街の鐘が彼らのために鳴っているかのようだった」

これらの構造において、命題 (Proposition) となる定形節が主題 (Theme) となり、この主題の意味上の主語である与格が経験者という意味役割 (θ -role) となるが ((4a)、与格が出現しない場合は(4b)のようにこの経験者が明示されない。

*5 上野(2020b)では、フランス語が 66.1% (出現) : 33.9% (非出現)、イタリア語が 28.9% (出現) : 71.1% (非出現) という結果となっている。

*6 イタリア語に関しては、*CORIS Corpus* からデータの収集を行っている。*CORIS Corpus* におけるサブカテゴリーは次の通り。*MONITOR* : モニターコーパス、*NARRAT* : 小説・物語、*PRACC* : 学術散文、*STAMPA* : 新聞・雑誌。

(4) a. 与格あり : *sembler/sembler* (Experiencer, Theme (Proposition))

b. 与格なし : *sembler/sembler* (Theme (Proposition))

フランス語 *sembler* の場合、(4a)で示した与格が出現する構造を多用するわけであるが、この与格が出現する構造は経験者の格 (case) の相違はあるものの、認識動詞 (epistemic verb) *croire* と類似した他動詞的構造に近いものとなる。

(5) a. [_{VP} DP_{Dat} *sembler* [_{CP} *que*...]]

b. [_{VP} DP_{Nom} *croire* [_{CP} *que*...]]

(5)で示したように、*croire* の主語が主格 (nominative) で *sembler* の主語が与格であるという違いを除くと、二つの動詞の構造は同じであると言える。この意味で、与格が出現する構造を多用するフランス語 *sembler* は、他動詞的構造を取ると言える。一方、意味役割として命題である主題だけを後続させる (4b) の構造は、経験者を明示しないということから非人称・非対格構造と類似した構造となり、与格が出現しない構造を多く使用するイタリア語 *sembrare* は非人称・非対格的構造であるという指摘が可能となる。

以上のことから、上野 (2020b) では、本質的にフランス語 *sembler* が動詞性が強く、イタリア語 *sembrare* が繫辞性 (copulanness) が強いという主張を行っている。同様の指摘は、上野 (2021) において、イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における自動詞用法の派生に関する考察でもなされている。

本稿はイタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* におけるこのような考察を踏まえて、特に、非人称用法における基底構造とその派生を分析することにより両言語の類似点と相違点をより明確にしていく。この中で、両言語における自動詞用法の考察を含めて、フランス語 *sembler* が *croire* と類似した構造を有することについても指摘していく。

2. イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の自動詞用法

イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の非人称用法の考察に入る前に、上野 (2021) で扱った自動詞用法に関する考察をここでまとめておく。

上野 (2021) では、イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における自動詞用法に関して、基底構造とその派生という観点からこれらの相違点を考察した。まず、両動詞における自動詞用法の基底構造は (6) のように示すことができる。

(6) a. *It.* : [_{VP} **sembrare** [_{AGP} DP/*pro* [_{AGR} XP]]]

b. *Fr.* : [_{VP} [+nominal]**sembler** [_{AGP} DP/*pro* [_{AGR} XP]]]

イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の基底構造は、主語 (subject: Subj) として DP/*pro*、そして VP (Inf)/DP/AP/PP などの範疇 (XP) を述語として持つ小節構造から構成さ

れる。基底構造における両言語における唯一の相違点は、フランス語がイタリア語にはない接語主語代名詞 (clitic subject pronouns) を持つということである^{*7}。このような基底構造から、両言語では(7)で示すような規範文 (canonical sentences) の派生が行われる^{*8}。

- (7) a. *It.*: i) [SubjP DP_j [AgrSP t_j sembrare_i [VP t_i [AgrP t_j [Agr' XP]]]]]
 ii) [SubjP [AgrSP pro_i sembrare_i [VP t_i [AgrP t_j [Agr' XP]]]]]
 b. *Fr.*: i) [SubjP DP_j [AgrSP t_j sembler_i [VP t_i [AgrP t_j [Agr' XP]]]]]
 ii) [SubjP [AgrSP pro_i [+nominal]sembler_i [VP t_i [AgrP t_j [Agr' XP]]]]]

両言語における規範文は、小節主語が DP の場合、AgrSP を経由して SubjP に繰り上がる。小節主語が *pro* の場合は AgrSP に *pro* が生じるが^{*9}、フランス語は接語主語代名詞が出現するという点でイタリア語とは異なる構造を示す。主語が語彙的 DP で属詞が AP として現れる文の派生を示したものが(8)である。

- (8) a. *It.*: [VP sembra [AgrP la luce [Agr' gialla]]]
 → [SubjP la luce_i [AgrSP t_j sembra_i [VP t_i [AgrP t_j [Agr' gialla]]]]]
 La luce sembra gialla_i,... (MONITOR)
 the moon seem_{pres.3sg} yellow
 「月は黄色く見える」
 b. *Fr.*: [VP semble [AgrP M. Bolloré [Agr' le plus isolé]]]
 → [SubjP M. Bolloré_i [AgrSP t_j semble_i [VP t_i [AgrP t_j [Agr' le plus isolé]]]]]
 M. Bolloré semble le plus isolé_i. (Le Monde)
 M. Bolloré seem_{pres.3sg} the most isolated
 「ボロレ氏が最も孤立しているようである」

(8)は、動詞 *sembra/semble* が TP に移動すると共に、DP である *la luce/M. Bolloré* と AP である *gialla/le plus isolé* で構成される小節構造の主語 DP が AgrSP 指定部 (specifier) を経由して SubjP に移動していることを示している。

以上の自動詞用法の基底構造からの派生を踏まえて、次節では非人称用法の基底構造とその派生を考察していく。

*7 接語主語代名詞は、動詞の上に [+nominal] という素性として生成すると考えられる (Safir 1985: 204)

*8 倒置文 (inverse sentences) に関しては、本稿と直接関係しないのでその説明を省略する。詳細については上野 (2021) を参照のこと。

*9 複数主語位置に関しては Cardinaletti (2004) を参照のこと。

3. イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の非人称用法

非人称用法には、定形節 (9) と非定形節 (10) が *sembrare/sembler* に後続するものがある。

(9) 定形節

a. *It.*: ..., anche se *mi sembra che* tu già le conosca tutte. (*MONITOR*)
also if me_{Dat} seem_{Pres.3Sg} that you already them_{Acc} know_{Subj Pres.2Sg} all
「君が彼女たちの全てを既に知っているように私には思えたとしても」

b. *Fr.*: Il *me semblait que* la déesse m'apparaisait... (*Corpatext*)
EXP me_{Dat} seem_{PastImp.3Sg} that the goddess me_{Dat}.appear_{PastImp.3Sg}
「私には目の前に女神が現れたかのように思われた」

(10) 非定形節

a. *It.*: Eppure *mi sembra di poter* scorgere il nome,... (*MONITOR*)
yet me_{Dat} seem_{Pres.3Sg} di can discern the name
「しかし、私にはその名前を見分けることができるように思える」

b. *Fr.*: ; il *lui semblait recommencer* la vie. (*Corpatext*)
EXP him_{Dat} seem_{PastImp.3Sg} restart the life
「彼は人生をやり直しているような気がしていた」

3.1. 定形節

sembrare/sembler に定形節が後続するものには、与格経験者 (dative Experiencer) が明示されるものと明示されないものがある。両者には構造上の相違があると思われるためここではそれぞれ分けて考察を行う。

3.1.1 <*sembrare che*>/<*sembler que*>

自動詞用法が原則、句 (phrase) を属詞とするのに対して、非人称用法は節 (clause) が属詞となる形式である。定形節が属詞となる派生は、まず、埋め込み節 (embedded clause) が形成された後に補文標識 *che/que* が併合する ((11))。

(11) [_{CP} *che/que* [_{TP} DP [_{VP} VP]]]

そして、この埋め込み CP が (12) のように *sembrare/sembler* と併合する。

(12) [_{VP} *sembrare/sembler* [_{CP} *che/que* [_{TP} DP [_{VP} VP]]]]

sembrare/sembler のような属詞動詞は、一項述語 (one-place predicate) であるため外項として θ 役割を要求しない。しかし、*sembrare/sembler* の EPP 素性を満足させるため、フラン

ス語では虚辞 *il*、イタリア語は空範疇 *pro_{expl}*^{*10} が生じる。このような主語位置に関して Cardinaletti (2004) では、TP 内に ϕ 素性 (ϕ feature) の一致が行われる文法的主語が位置する AgrSP と、'subject-of-predication' 「述語の主語」特性が照合される意味的主語が位置する SubJP という複数の主語位置があるという主張が行われている。これを用いて EPP 素性を満足させるための主語位置の派生を考えると、この段階において両言語に違いが見られる。即ち、イタリア語の場合は、V である *sembrare* が AgrSP の主要部へ移動すると共に、EPP 素性を満足させるため *pro_{expl}* が指定部に生じる ((13))^{*11}。

(13) [_{AgrSP} *pro_{expl}* *sembrare*_i [_{VP} *t_i* [_{CP} *che* [_{TP} DP [_{VP} VP]]]]]

一方、フランス語の場合は、V のすぐ上に生成した虚辞 *il*^{*12} が AgrSP の指定部へ移動する ((14))。

(14) [_{AgrSP} *il_j* *sembler*_i [_{VP} *t_j-t_i* [_{CP} *que* [_{TP} DP [_{VP} VP]]]]]

以下の (15) は、このような派生により生成された非人称用法の文である。

(15) a. *It.*: Nel frattempo **sembrava** che il soldato e il condannato avessero fatto amicizia;
 in.the meantime seem_{PresImp,3Sg} that the soldier and the convict hav_{CSubj,PresImp,3Pl} do_{PresP} friendship
 「そうこうするうちに、兵士と犯罪者が友達になっていたようだった」(NARRAT)

b. *Fr.*: Il **semblait** que chacune eût les traits de plusieurs de ces personnes.
 EXP seem_{PresImp,3Sg} that every-one hav_{CParSimp,3Sg} the features of some of these persons

「すべての人がこれらの人々の何らかの特徴を持っていたようだった」(Corpatext)

このような AgrSP 指定部に *pro* や虚辞が現れ、'subject-of-predication' の位置する SubJP が空である構造は、論理的判断として Kuroda (1972) が指摘する *thetic judgement*^{*13} 「単独判断」または *judgement material* そのものを示すものであると思われる。*thetic judgement* 解釈は、一般的に、存在文 (existential sentences) や非人称文 (impersonal sentences) などの 'subjectless' の文に見られるが、経験者や格の出現しない *sembrare/sembler* の非人称用法も、SubJP が

*10 "A null pronominal is essentially like overt weak pronominals, such as English *it* and French *il*, minus phonological content." (Cardinaletti 2004: 132).

11 本稿では Cardinaletti (2004: 154) で示されている [_{specSubJP} _{specEPP} _{specAgrSP} ... _{specVP}] という主語位置カートグラフィーを採用している。

*12 Safir (1985) に従い、V が持つ [+nominal] 素性により接語代名詞が生成し、T から主格を付与されて *il* という形態が生じると考える。即ち、[_{TP} T[+NOM]] [_{VP} [+nominal] *sembler*] という構造から [_{VP} *il sembrer*] が派生する。

*13 *thetic judgement* となるのは、主語または述語に実質的な意味がないか希薄であり、判断対象に当たる素材の表示が主語か述語のどちらか一方に限られる場合とされる。

空であることからこれらと等価であると判断することが可能である。

しかしながら、与格経験者が出現する非人称用法は、従属節とは別の与格経験者の判断が加わるため *thetic judgement* 解釈とはならない。次に、このような与格経験者が出現する非人称用法の構造について考察を行っていく。

3.1.2 与格経験者が出現する構造

3.1.2.1 イタリア語

与格経験者が出現するイタリア語 *sembrare* の非人称用法には(16)のような文がある。

(16) a. ..., *a Gennaro Lopez sembrava che l'ospite di tanto in tanto perdesse tono.*

to Gennaro Lopez seem_{PartImp,3Sg} that the.guest from time to time lose_{CSubj,PartImp,3Sg} tone

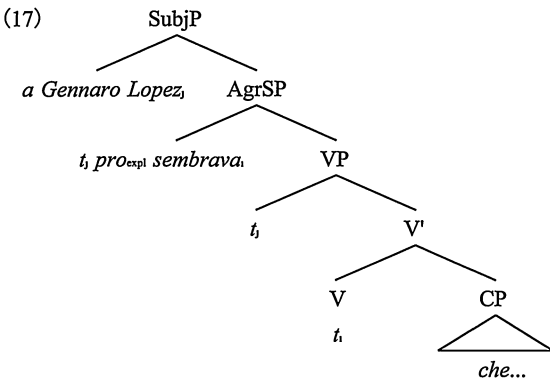
「ジェンナロ・ロペスにはその客人が時折正気を失っていたように思われた」

(MONITOR)

b. ..., *anche se mi sembra che tu già le conosca tutte.* (= (9a))

(16a)では語彙的与格 *a Gennaro Lopez*、(16b)では接語与格 *mi* が経験者として出現しており、'subject-of-predication'が与格経験者として形態的に明示されている。

まず、語彙的与格経験者を伴う構造を考えてみると、この与格経験者は AgrSP を經由して SubjP へ移動する。(16a)の派生を簡略的に示すと(17)のようになる¹⁴。



(17)は、主語位置である VP 指定部に併合した与格経験者 *a Gennaro Lopez* が AgrSP を經由して SubjP 指定部へ移動していることを示している。このような SubjP に

¹⁴ Belletti and Rizzi(1988)では、与格経験者が出現する位置を VP の付加部 (adjunct) としているが、本稿では VP の指定部に現れるものと設定している。いずれにしても、与格経験者は主題よりも高い位置に現れ、Jackendoff(1990)で示された "Thematic Hierarchy" に合致した配置をする。

'subject-of-predication'が出現する構造は、Kuroda (1972) の言う *categorical judgement*^{*15} 「複合判断」の解釈を示す。しかしながら、(18)の例にあるように、この語彙的与格経験者は必ずしも統語的に SubjP に移動するわけではない。

(18) ..., *sembra a me* che queste riflessioni di un neurobiologo portoghese-americano ci
seem_{Pres,3sg} to me that these reflection of a neurobiologist Portuguese-American USD_{at}
 dicano cose più radicali e più illuminanti di molte analisi della contemporaneità,..
say_{Subj,Pres,3Pl} things more radical and more illuminating than many analyses of.the contemporaneity
 「ポルトガル系アメリカ人神経生物学者のこれらの考察が現代の多くの分析より根源
 的で啓発されたものであると我々に伝えているように私には思える」 (PRACC)
 (18)における語彙的与格経験者 *a me* は SubjP に移動せず VP 内に留まっている^{*16}。このこ
 とは、*categorical judgement* となる文の主語が必ずしも SubjP に移動するわけではないとい
 うことを示している。

同じような語彙的与格経験者の移動の有無は、与格心理動詞 (*psych verb*)^{*17} にも見られ
 る。

(19) a. ..., *se a mamma non dispiace* che dia un'occhiata alla lettera... (NARRAT)
if to mother not be.sorry_{Pres,3sg} that give_{CSbj,Pres,3sg} a.glance to.the letter
 「手紙に目を通すことが母にとって残念であるなら」
 b. ...*non dispiacerebbe allo psicanalista* che visitava Fiorella. (NARRAT)
not be.sorry_{Cond,Pres,3sg} to.the psychoanalist that visit_{PassImp,3sg} Fiorella

「フィオレッタを訪れたことは精神分析学者にとって残念なことではないだろう」
 与格心理動詞に出現する語彙的与格経験者は(19a)のように文頭に出現するものが一般的
 であるが、(19b)のように VP 指定部に留まるものも散発的に見られる。このように動詞
sembrare の非人称用法や与格心理動詞で見られるように、イタリア語においては、語彙的
 与格経験者は SubjP に移動するのが一般的であるが、VP 内に留まることも可能である。

SubjP に移動することなく *categorical judgement* と解釈されるのは、(16b)のような与格

*15 *categorical judgement* となるのは、例えば、複文において従属節の判断を主節の判断が巻き込むよ
 うな場合に見られる。

*16 イタリア語 *sembrare* では、語彙的与格経験者が SubjP に移動する構造の方が一般的である。

*17 Belletti and Rizzi (1988) で示されている三種類の心理動詞の内、*piacere* などの非対格構造となる心理
 動詞を本稿では与格心理動詞と呼ぶ。

経験者が接語の場合にも当てはまる。ここで、(16b)の派生を示したものが(20)となる。^{*18}

(20) [_{AgrSP} *pro*_{expl} *mi*_j *sembra*_i [_{VP} *t*_j-*t*_i [_{CP} *che*...]]]

(20)で示したように、動詞 *sembra* に基底生成する与格経験者 *mi* は AgrSP に移動する。この与格経験者がさらに SubjP に移動すると(16a)の語彙的与格経験者と同じ構造になるのであるが、弱代名詞(weak pronoun)である *mi* が V である *sembra* を残して SubjP に移動するというのは考えにくい。この場合、与格経験者は接語として AgrSP の位置に留まり、categorical judgement 解釈を受けるものと思われる。

VP 指定部に残留する語彙的与格経験者や AgrSP にある接語与格が SubjP に移動することなくどのようにして categorical judgement と解釈されるのかについては、LF での移動などの可能性が考えられるが、このことについては別の機会に論じたいと考えている。

以上のような定形節を取るイタリア語 *sembrare* の非人称用法の派生を一般化して記述すると(21)のようになる。

(21) a. 与格経験者なし (thetic judgement)

[_{AgrSP} *pro*_{expl} *sembrare*_i [_{VP} *t*_i [_{CP} *che*]]]

b. 与格経験者あり (categorical judgement)

i) 語彙的与格経験者

[_{SubjP} *a NP*_j [_{AgrSP} *pro*_{expl} *sembrare*_i [_{VP} *t*_j *t*_i [_{CP} *che*]]]]]

ii) 接語与格経験者

[_{AgrSP} *pro*_{expl} *CL*_J-*sembrare*_i [_{VP} *t*_j-*t*_i [_{CP} *che*]]]

このような与格経験者は、上野(2015)の調査で 35.8%、上野(2020b)で 28.9%という割合で出現しており、いずれにおいてもイタリア語 *sembrare* は与格経験者のない thetic judgement の解釈での使用が優勢となっている。この点は、後述するがフランス語 *sembler* と対照的な結果となっている。

3.1.2.2 フランス語

上野(2020b)の調査では、フランス語 *sembler* で与格経験者が出現する割合が 66.1%となっており、イタリア語 *sembrare* とは逆に、フランス語 *sembler* は与格経験者が出現する方が一般的な構造となる。

*18 代名詞を含めた接語の派生については、動詞に基底生成するという考え方と、VP から移動するというものがあるが、本稿では基底生成の説を採用することにする。詳細については Sportiche(1996)・Torrego(2002)を参照。

(22) a. Il **semb**la donc à d'Artagnan que M. Bonacieux portait un masque,...

EXP seem_{PresSimp 3Sg} therefore to d'Artagnan that M. Bonaciux wear_{PastImp 3Sg} a mask

「だから M.ボナシユが仮面を着けていたとダルタニヤンには思えた」(Corpatext)

b. ..., il **me sem**blait que je savais tout, ... (Corpatext)

EXP mCDat seem_{PastImp 3Sg} that I venir_{PastImp 1Sg} all

「私はすべてが分かっていたかのように思えた」

(22)に見られる語彙的与格 *à d'Artagnan* や接語与格 *me* が経験者の θ 役割を示すことはイタリア語の場合と同じであるが、イタリア語と比較すると、与格経験者の統語的出現位置が異なる。

語彙的与格経験者が出現する(22a)のような場合、語彙的与格経験者は移動せずに VP 内に留まるため動詞に後置する。そして、動詞だけが TP へ移動する ((23))。

(23) [_{TP} il, **semb**la, [_{VP} à d'Artagnan *t_i* [_{CP} que...]]]

このように語彙的与格経験者が元位置に留まるのは、フランス語が non null-subject (NNS) language (非空主語言語) であることと、虚辞 *il* が接語代名詞であることに関係すると考えられる。イタリア語のような null-subject (NS) language (空主語言語) では、このような場合、AgrSP に空範疇 *pro_{expl}* が生じるがこの空主語は語彙的な項ではないため、この位置を経由して SubjP に語彙的与格経験者が移動することが可能となる¹⁹。一方、NNS 言語であるフランス語では AgrSP 指定部にすでに虚辞 *il* が位置しているためそれを飛び越えて SubjP に移動することができない。このため、*il* の前、すなわち、SubjP に語彙的与格経験者が出現できないと考えられる。また、虚辞 *il* は動詞に隣接する接語であるため、その間に語彙的与格経験者が移動することも不可能である。このような理由により、フランス語の語彙的与格経験者は元位置に留まると考えられる²⁰。

同じような語彙的与格経験者の残留は、フランス語の与格心理動詞にも見られる。

(24) a. La musique **plaît** à Jean.

the music pleases to Jean

「ジャンは音楽が好きだ」

*19 語彙的与格経験者は 'the Experiencer behaves as a NP/DP' (Torrego 2002: 250) であるため、指定部に移動するものと考えられる。

*20 Torrego (2002: 263) は、スペイン語で "??Le parece (a Juan) haver resuelto todas las dificultades." のように語彙的与格が動詞に後置する場合に不適格となることについて、語彙的与格が *pro* の付加部にあり、*pro* に隣接しなければならないため、T より下に出現できないと説明している。

b. *A *Jean plaît* la musique. (Montrul 1998: 35, 一部改変)

(cf. A *Jean piace* la musica. [It.])

(24)のような基底構造が非対格構造である与格心理動詞は、フランス語では(24a)のように主題である非対格項 *la musique* を主語位置に移動し、語彙的与格経験者 *à Jean* を元位置に残留する必要がある、イタリア語のように語彙的与格経験者を動詞の前に移動した派生は(24b)で示したように容認されない。これも *sembler* の場合と同様、フランス語が NNS 言語であるということに起因していると考えられる。

次に、(22b)のような与格経験者が接語与格として出現する場合の派生を考えてみる。この接語与格は接語として V の上に基底生成する ((25))。

(25) [_{AGRSP} *il*]_i *mek* *semblait*_i [_{VP} *t_j* *t_k*-*t_k*] [_{CP} *que*...]]

(25)では、基底生成した接語与格と動詞 *semblait* が TP へ移動すると共に、虚辞主語 *il* が AGRSP 指定部に移動していることを示している*21。

このような語彙的与格であれ接語与格であれ与格経験者の出現する文は categorical judgement の解釈を受けるが、フランス語の場合は、SubjP に移動することによってこの解釈を受けることがないということが分かる*22。

以上のような定形節を取るフランス語 *sembler* の非人称用法の派生を一般化して記述すると(26)のようになる。

(26) a. 与格経験者なし (thetic judgement)

[_{AGRSP} *il*]_i *sembler*_i [_{VP} *t_j* *t_k*] [_{CP} *que*...]]

b. 与格経験者あり (categorical judgement)

i) 語彙的与格経験者

[_{AGRSP} *il*]_i *sembler*_i [_{VP} *à* NP *t_j* *t_k*] [_{CP} *que*...]]

ii) 接語与格経験者

[_{AGRSP} *il*]_i CL_k-*sembler*_i [_{VP} *t_j* *t_k*-*t_k*] [_{CP} *que*...]]

*21 与格心理動詞においても、i)のように接語与格は動詞の前に出現する。

(i) La musique *lui* **plaît**.
the musique him_{DP} pleases

*22 定形節を後続させる構造において、与格経験者がなければ接続法、あれば直説法が使用される傾向がある(中本 2013: 131)。これは、接続法で示される命題と与格経験者で示される主節主語の判断という2つの判断で解釈される categorical judgement と、直説法で示される命題と *sembler* が一体となる thetic judgement との相違の表れと捉えることが可能であると思われる。

3.2. 非定形節

sembrare/sembrer に非定形節が後続するものにも、与格経験者が明示されるものと明示されないものがある。ここでも、イタリア語とフランス語に分けて考察を行っていく。

3.2.1 イタリア語

非人称用法における非定形節が属詞となる派生は、イタリア語では補文標識 *di* に不定詞が後続する *di*-Inf が *sembrare* に併合し、その後これが TP へ移動し、定形節の場合と同様、主語位置に *pro_{expl}* が生じる。

(27) [_{TP} *pro_{expl} sembrare*_i [_{VP} *t_i* [_{CP} *di* [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

非人称用法の場合、自動詞用法とは異なり、不定詞の明示的主語が現れないことから、その位置には空範疇 PRO が出現するコントロール構造となる。

このようにして派生する文には(28)のようなものがある。

(28) a. ..., **sembra di essere** in albergo. (MONITOR)

seem_{pres.3sg} di be in hotel

「ホテルにいるような感じだ」

b. **Sembra di assistere** ad una configurazione sorprendentemente identica: (STAMPA)

seem_{pres.3sg} di attend to an configuration surprisingly identical

「著しく同じような配置に出くわしているようだ」

与格経験者が出現しないこのような構造は、定形節と同様、AgrSP 指定部に *pro_{expl}* が現れ、論理的判断として *thetic judgement* を示す。このような非人称用法の *sembrare* は、繰り上げ動詞 (*raising verbs*) ではなくコントロール動詞 (*control verbs*) であり、不定詞の主語が何らかの名詞句にコントロールされる PRO として出現する。このため、随意的コントロール (*optional control*) となる与格経験者が出現しない構造での使用は低い使用頻度となり (32.5%)、与格経験を伴う構造が多用される (67.5%) (上野 2020b: 56)。

その与格経験者が出現するイタリア語 *sembrare* の非人称用法には(29)のような文がある。

(29) a. **A Piotr sembra di viaggiare** per il mondo a una velocità indiana. (NARRAT)

to Piotr seem_{pres.3sg} di travel to the world at a velocity furious

「恐ろしいスピードで世界を旅しているようにピョートルには思える」

b. Già **mi sembra di leggere** sui giornali: (STAMPA)

indeed me_{dat} seem_{pres.3sg} di read on-the newspapers

「確かに新聞で読んだように私には思える」

(29a)は語彙的与格経験者 *a Piotr*、(29b)は接語与格 *mi* が出現している例であり、基本的にいずれも動詞 *sembrare* に前置し、categorical judgement の解釈を受ける。しかしながら、定形節の場合と同様、語彙的与格経験者は(30)のように VP に留まることも可能である。

(30) ..., *ma sembra a Phil Wittacher di vedere gli occhi di Melissa Dolphin brillare di qualcosa...*

but seem_{Pres.3Sg} to Phil Wittacher di see the eyes of Melissa Dolphin shine of something

「しかし、フィル・ウイテカーにはメリッサ・ドルフィン目に何らかのきらめきを見たような気がしている」 (NARRAT)

以上の非定形節を取るイタリア語 *sembrare* の非人称用法の派生を一般化して記述すると(31)のようになる。

(31) a. 与格経験者なし (thetic judgement)

[_{AgrSP} *pro*_{expl} *sembrare*, [_{VP} *t_i* [_{CP} *di* [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

b. 与格経験者あり (categorical judgement)

i) 語彙的与格経験者

[_{SubjP} *a NP_j* [_{AgrSP} *pro*_{expl} *sembrare*, [_{VP} *t_i* [_{CP} *di* [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]]]

ii) 接語与格経験者

[_{AgrSP} *pro*_{expl} CL_o-*sembrare*, [_{VP} *t_i-t_i* [_{CP} *di* [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

3.2.2 フランス語

イタリア語 *sembrare* に後続する非人称用法の非定形節では補文標識 *di* が義務的に出現したが、フランス語 *sembler* に後続する不定詞には明示的な補文標識が見られない。

まず、与格経験者が出現しないものとしては(32)のようなものがある。

(32) a. ..., *il semblait prendre le plus grand soin.* (Corpatext)

EXP seem_{PresImp.3Sg} take the most big care

「最大限の配慮をしていたようだった」

b. ..., *et néanmoins il semble s'emparer du temps.* (Corpatext)

and nevertheless EXP seem_{Pres.3Sg} seize of.the time

「それにもかかわらず時間を独占しているようだ」

与格経験者が出現しないこのような構造は、定形節と同様、AgrSP 指定部に虚辞 *il* が現れ、論理的判断として thetic judgement を示す。このような与格経験者が出現しない構造は、イタリア語以上にその使用頻度が低い(21.3%) (上野 2020b: 56)。一方、多用される与格経験者の出現する categorical judgement を示す構造(79.7%)は、すべて(33a)のような経験者に接語与格が現れるものであり、(33b)のように語彙的与格経験者が *sembler* に後続する場合はフランス語では非文法的となる。

(33) a. Il *lui* **semble avoir résolu** toutes les difficultés.

EXP he/she_{Dat} seem_{Pres.3Sg} have resolv_{C_{Pass}P} all the difficulties

「彼（女）はすべての困難を解決したと思っている」

b. *Il **semble à Pierre avoir résolu** toutes les difficultés. (Torrego 2002: 260, 一部改変)

非人称用法において語彙的与格経験者の出現が容認されないということを考察する前に、同じように自動詞用法についても語彙的与格経験者の出現が容認されないということを考えてみる。

(34) ??Marie **semble à Jean être fatiguée**. (Torrego 2002: 253, 一部改変)

Marie seem_{Pres.3Sg} to Jean be tired

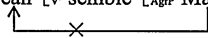
「マリーが疲れているようにジャンには思える」

自動詞用法においても(34)のように、語彙的与格経験者 *à Jean* が出現する構造は容認されない。このような語彙的与格経験者は、あるレベルで DP 主語として動詞 *sembler* の VP 指定部で併合する (Torrego 2002)。自動詞用法の非定形節は小節構造であることから、その小節を AgrP とすると (34) の文は (35) のように示すことができる (上野 2021)。

(35) [_{VP} (à) Jean [_v semble [_{AgrP} Marie [_{Agr'} être fatiguée]]]]

(35) は、小節主語 (Subj) *Marie* と小節述語 (Pred) *être fatiguée* で小節が構成され、それに動詞 *semble* とその主語 *Jean* が併合していることを示している。この後に T が併合し、小節主語 *Marie* は VP 指定部を経由して TP 指定部へ連続循環的 (cyclic successive) に繰り上がるにより主節主語位置に生じることになる。しかし、VP 指定部にはすでに (à) *Jean* があるためこの移動ができない。このために、語彙的与格経験者が出現する自動詞用法の文は容認されないと思われる²³。

(36) [_{TP} _ [_{VP} (à) Jean [_v semble [_{AgrP} Marie [_{Agr'} être fatiguée]]]]]



このように、自動詞用法において語彙的与格経験者が出現できない場合と、(33b) のような非人称用法とでは、その理由が少し異なる。まず、非人称用法の非定形節の基底構造は、空補文標識 \emptyset のあるコントロール構造である ((37))。

(37) [_{VP} *sembler* [_{CP} \emptyset [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]

*23 イタリア語の自動詞用法に関しても同様の指摘ができ、(i) のような文は非文法的となる。

(i) *Gianni **sembra a Maria essere** stanco. (Torrego 2002: 253, 一部改変)

Gianni seem_{Pres.3Sg} to Maria be tired

「ジャンニが疲れているようにマリアには思える」

イタリア語においても *sembrare* に後続して現れる語彙的与格経験者が非文法的になるのは、この非定形節の構造が小節構造であることに起因していると考えられる。

そして V の上に虚辞 *il* が生成する。この虚辞 *il* は接語代名詞であるが、主語であるため VP の指定部に位置するものと考えられる (38)。

(38) [_{VP} *il* [_V *sembler* [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

語彙的与格経験者は VP の指定部に併合するのであるが、この段階で VP の指定部はすでに虚辞 *il* で占められている。語彙的与格経験者はこの同じ位置に併合する必要があるため、(33b) のような構造が容認されないと考えられる。

与格経験者が接語の場合は (33a) で示したように適格な文となるが、これは接語与格が動詞に併合し、接語として動詞とともに TP へ移動する。このような接語は主語位置に関与しないため、与格接語が出現する構造は容認される (39)。

(39) [_{VP} *il* [_V CL-*sembler* [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

このように、非人称用法において語彙的与格経験者の出現が容認されないのは、義務的な虚辞 *il* の存在、即ち、フランス語が NNS 言語であることがその要因であると考えられる。一方、NS 言語であるイタリア語では、(40a) のような *sembrare* に後続する語彙的与格経験者の出現や、(40b) のような語彙的与格経験者が先行する文が文法的となる。

(40) a. ...**sembra a Phil Wittacher di vedere** gli occhi... (= (30))

b. *A Piotr sembra di viaggiare* per il mondo a una velocità indiatolata. (= (29a))

イタリア語は NS 言語であり、VP の指定部に虚辞などを置く必要がないため、語彙的与格経験者が併合することができる (41)。

(41) [_{VP} a NP [_V *sembrare* [_{CP} di [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

このようなことから、語彙的与格経験者の出現の可否は、NS 言語であるかどうかということに依存していることが指摘できる。

以上、非定形節を取るフランス語 *sembler* の非人称用法の派生を一般化して記述すると (42) のようになる。

(42) a. 与格経験者なし (thetic judgement)

[_{AgSP} *il*_i *sembler*_i [_{VP} *t*_i [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

b. 接語与格経験者あり (categorical judgement)

[_{AgSP} *il*_i CL_k-*sembler*_i [_{VP} *t*_j *t*_{k-t} [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

4. フランス語 *sembler* と *croire* の類似性

上野 (2020b) では、定形節を後続させるイタリア語 *sembrare* ・ フランス語 *sembler* の非人称用法の構造に関して、数量的調査からフランス語 *sembler* は与格経験者が出現する構

造がイタリア語に比べて多いということを指摘している^{*24}。このことは、定形節を後続させる *sembler* の非人称用法が categorical judgement の解釈を受ける構造での使用が一般的であるということの意味し、このような解釈が一般的に行われる認識動詞 *croire*^{*25} との類似性が示唆される。そこで、本節では、このような解釈の類似性に加えて^{*26}、統語的視点から *sembler* と *croire* の類似性についての分析を試みる。

まず、定形節が後続する (43) の *sembler* の文から考えてみたい。

(43) Il *me* **semble** que Sakamoto est très intelligent. (Ruwet 1982: 32, 一部改変)

EXP meDat seemPres.3sg that Sakamoto bePres.3sg very intelligent

「坂本は大変賢いように私には思える」

(43) で示した *semble* に後続する定形節は、意味上、*semble* の主語節として捉えることができる。しかしながら、*sembler* と類似した構造を取る心理動詞 *plaire* が (44b) のように主語節である定形節を文頭に置くことが可能であるのに対して、同じ位置に主語節を置いた (45) のような *sembler* の文は容認されない。

(44) a. Il *me* **plairait** beaucoup que Murasaki porte ce kimono.

EXP meDat pleaseCond.Pres.3sg very-much that Murasaki carrySubj Pres 3sg this kimono

「紫の上がこの着物を持ってきてくれて私は大変嬉しい」

b. Que Murasaki porte ce kimono *me* **plairait** beaucoup. (Ruwet 1982: 31, 一部改変)

(45) *Que Sakamoto soit très intelligent *me* **semble**. (Ruwet 1982: 32, 一部改変)

このようなことから、非人称用法の *sembler* に後続する定形節は統語的には主語節ではなく、(46) のような *croire* に後続する目的語節に近いものであるという考えが生じる。

(46) Katsu **croit** que Sakamoto a compris ses intentions.

Katsu thinkPres.3sg that Sakamoto havePres.3sg understandPastP his intentions

「坂本が彼の意図するところを理解していたと勝は思っている」

(Ruwet 1982: 33, 一部改変)

(46) における定形節は動詞 *croit* の直接目的語にあたる節であるが、このような節と *sembler* に後続する定形節には類似した統語現象が見られる。

例えば、中性代名詞 *le* は (47) のように *croire* の直接目的語となる定形節に代わることができるが、同様のことは (48) のように *sembler* でも可能である。

*24 非人称用法の定形節を後続させる構造において、与格経験者の出現するものがイタリア語 *sembrare*

では 28.9% 見られるのに対して、フランス語 *sembler* では 66.1% となる (上野 2020b: 57)。

*25 この種の認識動詞には、*croire* の他に *estimer* や *confirmer* などがある (Jones 1996)。

*26 Ruwet (1982: 63) には、*croire* が行為動詞であるのに対して *sembler* が状態動詞であるとの指摘がある。

(47) Est-ce que tu **crois** que Genji vaincra Heike? - Oui, je le **crois**.

QM you think_{Pres.2Sg} that Genji beat_{Tut.3Sg} Heike Yes I le think_{Pres.1Sg}

「源氏は平家を打ち負かすと思うか? -はい、そう思います」

(Ruwet 1982: 37, 一部改変)

(48) Est-ce qu'il *te* **semble** qu'Okubo est intelligent? - Oui, il me le **semble**.

QM EXP you_{Dat} seem_{Pres.2Sg} that.Okubo be_{Pres.3Sg} intelligent Yes EXP me_{Dat} le seem_{Pres.3Sg}

「大久保は賢いと思うか? -はい、そう思います」 (Ruwet 1982: 37, 一部改変)

一般的に、中性代名詞 *le* は目的語位置にあるものを代用する代名詞である。(48)のように、*sembler* に後続する定形節が *le* で代用されることは、*sembler* の定形節が他動詞の直接目的語と同じような位置にあることを意味する。

また、疑問文の派生ということからも同様の指摘ができる。フランス語では一般的に、

(49)のような無生物主語の疑問文を生成できないという制約がある。

(49) **Que concerne éminemment Jimmu?* (Ruwet 1982: 40, 一部改変)

what concern_{Pres.3Sg} eminently Jimmu

「神武天皇は何に極めて関心がありますか?」

しかし、このような制約は直接目的語からの疑問文の生成には見られない。

(50) a. *Que crois-tu?* (Ruwet 1982: 40, 一部改変)

what think_{Pres.2Sg}-you

「君は何を考えているの?」

b. *Que te semble-t-il?* (Ruwet 1982: 41, 一部改変)

what you_{Dat} think_{Pres.3Sg}-t-EXP

「君は何を考えているの?」

(50)では、疑問詞 *que* が *croire* においても *sembler* においても同じ場所から移動していることを示しており、このことから *sembler* の補部は主語ではなく目的語位置であると指摘できると思われる。このような目的語位置は、*croire* の目的語が置かれる他動詞の対格項に対して、自動詞 *sembler* の場合は非対格項と呼ぶことができる。

定形節における動詞の叙法 (mood) に関して、*croire* のある主節が否定や疑問でない場合は原則直説法が用いられるが、与格経験者が出現する *sembler* の非対格項である定形節においても直説法が用いられる²⁷。

(51) a. ..., il me **semblait** que je savais tout,... (= (22b))

b. Katsu **croit** que Sakamoto a compris ses intentions. (= (46))

*27 イタリア語 *sembrare* の定形節では、接続法が用いられるのが一般的である。。

(51a)では *semblait* に後続する定形節の動詞が直説法半過去形 *savais* として出現しており、(51b)では *croit* に続く定形節の動詞が直説法現在形 *a* として出現している。このように、与格経験者が出現する *sembler* と *croire* に後続する定形節は、どちらも直説法が一般的に使用され、この点においても両動詞の類似性が見られる。

sembler と *croire* の類似性は、定形節の出現位置や定形節内の直説法の使用以外にも、DP/AP/PP が *sembler/croire* に後続する構造にも見られる。ここで、小節構造となる自動詞用法 *sembler* に後続する各属詞と、これに対応する *croire* の用例を以下に挙げてみる。

(52) Pred: DP

a. Le principal enjeu de l'époque *me* **semblait** la libération sexuelle. (*Le Monde*)

the principal issue of the.epoch me_{dat} seem_{Pres.3Sg} the liberation sexual

「時代の主要な争点は性の解放であると私は思っていた」

b. Elle **croyait** Jean un grand savant. (Kayne 1975: 303)

she think_{Pres.3Sg} Jean a great scientist

「ジャンが偉大な科学者だと彼女は思っていた」

c. ...tout Paris *me* **croyait** la maîtresse de ce pauvre vieillard. (*Corpatext*)

all Paris me_{acc} think_{Pres.3Sg} the mistress of this poor old.man

「パリ中が私をこの哀れな老人の女主人だと思っていた」

(53) Pred: AP

a. Une scission *me* **semble** improbable,... (*Le Monde*)

a division me_{dat} seem_{Pres.3Sg} improbable

「分裂はあり得ないと私は思う」

b. Elle **croyait** Jean capable de tout faire. (Kayne 1975: 303)

she think_{Pres.3Sg} Jean capable of everything do

「彼女はジャンが何でもできると思っていた」

c. ...quand le vulgaire *me* **croyait** malheureux,... (*Corpatext*)

when the vulgarity me_{acc} think_{Pres.3Sg} unhappy

「世間が私を不幸だと思っていた頃」

(54) Pred: PP

a. ...l'inflation **semble** entièrement sous contrôle en Europe. (*Le Monde*)

the.inflation seem_{Pres.3Sg} entirely under control in Europe

「インフレはヨーロッパでは完全にコントロール下にあるように思われる」

b. Je **croyais** monsieur Chaumontel en Suisse... (*Corpatext*)

I think_{Pres.1Sg} Mr. Chaumontel in Swiss

「私はショモンテル氏がスイスにいると思っていた」

c. ...parce qu'elle le **croyait** sur la sellette. (Corpatext)

because she him_{Acc} think_{K_{realimp}-3Sg} on the dock

「彼女は彼が被告席にいらしていると思っていた」

(52a-54a)で示したように、*sembler* に後続する小節主語は、動詞前位置に繰り上がり主格が付与される。一方、(52b-54b)で示した *sembler* と同じような属詞を後続させる *croire* は、主節にはすでに主語があるため繰り上がることはなく元位置に留まる。この場合の小節主語には、(52c-54c)のように代名詞となる場合に対格であることから、対格が付与されていると考えられる。これは、英語の認識動詞の格付与に見られる例外的格標示 (exceptional Case-marking: ECM) と同じ操作であると考えられる^{*28}。このように、両動詞においては小節主語の位置と小節主語の格は異なるが、基底構造としては同じ小節構造を有していると考えられる^{*29}。

次に、不定詞を後続させる構造についての考察を行う。まず、不定詞を後続させる *croire* には(55)のような例がある。

(55) Le comte **croit** remplir ce rôle; (Corpatext)

the count think_{K_{res}-3Sg} fill this role

「伯爵はこの役割を果たすことを考えている」

一般的に(55)のような文は(56)のようなコントロール構造として分析される。

*28 Kayne (1975) では、*croire* は *être* のある '*croire* - NP - S' という深層構造を持ち、派生のある段階でこの *être* が削除されるとしている。この *être* が深層で存在すると仮定すると、小節主語は例外的に対格を標示していることになる。

*29 *sembler* においては、*être* が削除されていないものも容認される。

(i) Le principe **semble** être une analyse Gestalt,... (Corpatext)

the principle seem_{Prns-3Sg} be a analyse Gestalt

「原理はゲシュタルト分析であるようだ」

(ii) Jacques **semble** être un prophète de famille... (Corpatext)

Jacques seem_{Prns-3Sg} be a prophet of family

「ジャックは家族の予言者のようだ」

(iii) ; il **lui** **semblait** être dans une maison de fous,... (Corpatext)

EXP him_{Dat} seem_{Cod.Prns-3Sg} be in a house of madman

「彼は狂人の家にいるようだ」

(i)における自動詞用法の *sembler* における *être* の出現は、同定文 (identificational sentence) の読みとして義務的となるものである (上野 2021)。しかし、(ii)の措定文 (predicational sentence) の場合は、*être* の削除は選択的である。また、(iii)の *être* は、非人称用法において義務的に出現するものである。

(56) Le comte croit [_{CP} PRO remplir ce rôle]

それは、(57)のような主節主語と不定詞主語が異なる文が容認されないためである。

(57) *Jean croit Bill avoir menti. (Kayne 1984: 103, 一部改変)

Jean think_{Pres.1sg} Bill have lie_{PastP}

「ジャンはビルが嘘をついたと思っている」

英語においては(57)のような文の不定詞の主語が ECM により 'Jean believes Bill to have lied' のように容認されるが、フランス語にはこの ECM の機能が欠けているため非文法的となる (Kayne 1984: 103)。つまり、フランス語では Bill に格が付与できないため格フィルター (Case filter) により (57) の文が排除される。しかし、基底構造に主節主語とは異なる不定詞主語が存在するという事は、(58) のような例が容認されることから立証される。

(58) a. Quel homme crois-tu avoir volé l'argent?

which man think_{Pres.1sg}-you have steal_{PastP} the.money

「どの人がお金を盗んだと思う？」

b. l'homme que je crois avoir volé l'argent (Jones 1996: 415)

このような移動がどのように行われ、またどのように格が付与されるかについては、本稿の議論の本筋から逸れるので触れずにおくが^{*30}、いずれにしても、(58) のような文が容認されることから基底構造に不定詞主語が存在することは確認できる。このことから、不定詞を後続させる croire の基底構造は (59) のように示すことができる。

(59) [_{VP} croire [_{CP} DP/PRO [_{VP} Inf]]]

主節主語と不定詞主語が同じ場合は、PRO が主節主語コントロールされる。一方、主節主語と不定詞主語が異なる場合は、元位置で不定詞主語に格が付与できないので非文法的になるが、より高い CP に移動すると格が付与されて文法的となる。

以上のことから理解できた croire の基底構造を sembler と比較するために、ここで改めて不定詞が後続する sembler の用法を確認しておく。

(60) a. 非人称用法 ([_{TP} *il*_i (CL_k-)sembler_i [_{VP} (*t*_j) *t*_{k-t}] [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]])

Il lui semble avoir résolu toutes les difficultés. (= (33a))

b. 自動詞用法 ([_{TP} DP/*pro*_isembler_i [_{VP} *t*_i] [_{AGR} *t*_i] [_{AGR} Inf]]]])

Le récit suivant nous semble prouver cette affirmation. (Corpatext)

the story following us_{dat} seem_{Pres.3sg} prove this statement

「次の物語がこの主張の証拠となると私たちは思う」

*30 Rizzi (1990) では (58b) のような文が容認されるのは、相対的最低性条件 (relativized minimality condition) の立場から Comp にある Agr において格が認可されているためとしている。

(60) で示したように、不定詞が後続する *sembler* には、コントロール構造である非人称用法と、小節構造となる自動詞用法がある。これを不定詞を後続させる *croire* と比較すると、*croire* の不定詞主語が PRO となる場合が *sembler* の与格経験者のある非人称用法^{*1}((61))、*croire* の不定詞主語が DP となる場合が *sembler* の与格経験者のある自動詞用法 ((62)) に相当する。

- (61) a. [_{TP} DP_i *croire*_i [_{VP} t_i t_i [_{CP} PRO [_{VP} Inf]]]]
 b. [_{TP} i_j CL_k-*sembler*_i [_{VP} t_j t_k-t_i [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} Inf]]]]]

- (62) a. * [_{TP} DP_i *croire*_i [_{VP} t_i t_i [_{CP} DP [_{VP} Inf]]]]
 b. [_{TP} DP_i CL_k-*sembler*_i [_{VP} t_k-t_i [_{AgP} t_j [_{AgP} Inf]]]]]

(61) においては、*croire* の主語が主格として出現するのに対し、*sembler* の場合与格として現れる。このような経験者としての格に相違点はあるものの、派生した文はほぼ同じことを意味し、同じコントロール構造から派生している。(62a) は *croire* の不定詞主語 DP が主節主語位置に移動することができないためこの状態では非文法的になるが、より高い位置への移動で容認されるということは上述した通りである。このような不定詞主語 DP が *sembler* の小節主語 DP に相当し、*croire* の主節主語が *sembler* の接語与格に該当する。

以上のように、定形節・非定形節を後続させる *sembler* と *croire* には、構造上多くの類似点があるということが指摘できる。

5. 結論

本稿では、イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の非人称用法について、数量的調査(上野 2020b)によって見られた両言語における類似点・相違点を統語構造という観点から分析した。ここでは結論として、自動詞用法も含めたイタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の基底構造からの派生をまとめて記しておく。

(63) 自動詞用法

- a. *It.*: [_{VP} *sembrare* [_{AgP} DP/*pro* [_{AgP} VP (Inf)/DP/AP/PP]]]
 → [_{SubjP} DP_j [_{AgP}SP *pro*_k *sembrare*_i [_{VP} t_i [_{AgP} t_j/t_k [_{AgP} VP (Inf)/DP/AP/PP]]]]]
- b. *Fr.*: [_{VP} [+nominal]*sembler* [_{AgP} DP/*pro* [_{AgP} VP (Inf)/DP/AP/PP]]]
 → [_{SubjP} DP_j [_{AgP}SP *pro*_k [+nominal]*sembler*_i [_{VP} t_i [_{AgP} t_j/t_k [_{AgP} VP (Inf)/DP/AP/PP]]]]]

*31 非定形節における非人称用法においても、与格経験者を伴う文が高い割合で出現する(78.7%) (上野 2020b)。

(64) 非人称用法 (定形節)

- a. *It.*: [_{VP} (a NP) (CL-) *sembrare* [_{CP} *che*]]
→ [_{SubjP} (a NP)_i] [_{AGrSP} *pro*_{expl} (CL_k-) *sembrare*_i] [_{VP} (*t*_i) (*t*_k-) *t*_i [_{CP} *che*]]]
- b. *Fr.*: [_{VP} (à NP) [+nominal] (CL-) *sembler* [_{CP} *que*]]
→ [_{AGrSP} *il*_i (CL_k-) *sembler*_i] [_{VP} *t*_j (*t*_k-) *t*_i (à NP) [_{CP} *que*]]]

(65) 非人称用法 (非定形節)

- a. *It.*: [_{VP} (a NP) (CL-) *sembrare* [_{CP} *di* [_{TP} PRO [_{VP} VP (Inf)]]]]]
→ [_{SubjP} (a NP)_i] [_{AGrSP} *pro*_{expl} (CL_k-) *sembrare*_i] [_{VP} (*t*_i) (*t*_k-) *t*_i [_{CP} *di* [_{TP} PRO [_{VP} VP (Inf)]]]]]]]
- b. *Fr.*: [_{VP} [+nominal] (CL-) *sembler* [_{CP} \emptyset [_{TP} PRO [_{VP} VP (Inf)]]]]]
→ [_{AGrSP} *il*_i (CL_k-) *sembler*_i] [_{VP} *t*_j (*t*_k-) *t*_i [_{CP} \emptyset [_{TP} PRO [_{VP} VP (Inf)]]]]]]]

本論では、このような基底構造から派生する構造に対して以下のことを指摘した。

(66) a. 構造全般

- ・イタリア語 *sembrare*・フランス語 *sembler* 共に、基底構造は自動詞用法が小節構造、非人称用法が非対格構造である。
- ・イタリア語 *sembrare*・フランス語 *sembler* 共に、経験者と格がない場合は *thetic judgement*、ある場合は *categorical judgement* の解釈を受ける。

b. 自動詞用法

- ・イタリア語 *sembrare*・フランス語 *sembler* 共に、語彙的与格経験者の出現が容認できないのは、語彙的与格経験者が併合する位置 (VP 指定部) と小節主語が繰り上がる場所が同じためである。

c. 非人称用法 (定形節)

- ・イタリア語 *sembrare* で語彙的与格経験者が出現する場合、語彙的経験者と格は SubjP に移動するのが一般的であるが、VP に残留することも可能である。
- ・フランス語 *sembler* の語彙的与格経験者は、TP 指定部に虚辞主語 *il* が生じるため元位置に留まる。このため、SubjP に移動して *categorical judgement* の解釈を受けることはない。

d. 非人称用法 (非定形節)

- ・イタリア語 *sembrare* は補文標識 *di* を取り、フランス語 *sembler* は空補文標識 \emptyset を取る。
- ・イタリア語 *sembrare* において、語彙的与格経験者の出現が容認されるのはイタリア語が NS 言語であるということに起因する。
- ・フランス語 *sembler* において、語彙的与格経験者の出現が容認できないのはフラ

ンス語がNSS言語であることに起因する。

さらに本稿では、フランス語の *sembler* と *croire* の統語的類似性にも言及した。定形節を後続させる *sembler* の非人称用法は、*que* 節の文頭への移動ができないこと、*que* 節が中性代名詞 *le* で代用されること、目的語位置からの疑問文の生成が可能なこと、*que* 節における叙法に直説法が用いられること、などの点において *que* 節が後続する *croire* と同じような統語現象が見られる。また、*sembler* の自動詞用法において小節述語に VP 以外の DP/AP/PP が現れるものは、*croire* と同じような基底構造から派生するということも指摘した。このような *sembler* と *croire* の基底構造の類似性は (67) のようにまとめることができる。

(67) a. V + *que*

i) [_{VP} (à NP) *il* (CL-) *sembler* [_{CP} *que*]]

ii) [_{VP} DP *croire* [_{CP} *que*]]

b. V + DP/AP/PP

i) [_{VP} (CL-) *sembler* [_{AGR_P} Subj (DP) [_{AGR_r} Pred (DP/AP/PP)]]]

ii) [_{VP} DP *croire* [_{AGR_P} Subj (DP) [_{AGR_r} Pred (DP/AP/PP)]]]

c. V + VP (Inf)

i) [_{VP} *il* CL-*sembler* [_{CP} ∅ [_{TP} PRO [_{VP} VP (Inf)]]]]]

ii) [_{VP} DP *croire* [_{CP} PRO [_{VP} VP (Inf)]]]]]

定形節を後続させる場合、*sembler* ではその主語が語彙的与格経験者または接語与格で出現するのに対して、*croire* は主格主語で出現する ((67a))。また小節述語に DP/AP/PP が出現する場合、*sembler* では小節主語が主節主語位置に繰り上がるのに対して、*croire* では小節主語に ECM により対格が付与されその位置に留まる ((67b))。さらに、小節述語に VP (Inf) が出現する場合は、非人称用法の *sembler* と *croire* はコントロール構造となる ((67c))。

これに対して、*sembler* と *croire* で基底構造が異なると考えられるのは、*sembler* の後続に不定詞が来る自動詞用法である小節構造と不定詞主語 DP となる *croire* のコントロール構造の場合となる。

(68) V + VP (Inf)

i) [_{VP} CL-*sembler* [_{AGR_P} Subj (DP) [_{AGR_r} Pred (VP: Inf)]]]]]

ii) [_{VP} DP *croire* [_{CP} DP [_{VP} VP (Inf)]]]]]

このようなフランス語における *sembler* と *croire* の統語的類似性は、違った形でイタリア

語の *sembrare* と *credere*^{*32} にも見られる。このような問題は、各動詞の通時的な変遷からの考察も必要であると考えるが、このことに関しては今後の課題としていきたい。

<コーパス>

Lextutor French Corpus (<https://www.lex Tutor.ca/conc/fr/>)

CORIS Corpus, Università di Bologna (<http://corpora.dsllo.unibo.it/TCORIS/>)

<参考文献>

- Abeillé, Anne (1988) "Verbes «à montée» et auxiliaires dans une grammaire d'arbres adjoints", *Revue des linguistes de l'université Paris X Nanterre* 39, 1-38.
- Adger, David (2003) *Core Syntax: A Minimalist Approach*, Oxford University Press.
- Baptiste, Jean & La Curne de Sainte-Palaye (1972) *Dictionnaire historique de l'ancien langage François ou Glossaire de la langue Française IX R-S*, Georg Olms Verlag.
- Belletti, Adriana & Luigi Rizzi (1988) "Psych-Verbs and θ -Theory", *Natural Language & Linguistic Theory*, 6, 291-352.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Springer.
- Cardinaletti, Anna (2004) "Toward a Cartography of Subject Positions," in Rizzi, Luigi (ed.), *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 115-165.
- Everett, Daniel L. (1996) *Why There are no Clitics: An Alternative Perspective on Pronominal Allomorphy*, A Publication of the Summer Institute of Linguistics and the University of Texas at Arlington.
- Huot, Hélène (1982) "Constructions infinitives du français: le subordonnant *de*", *L'information Grammaticale* 15, 40-45.
- Jackendoff, Ray S. (1990) *Semantics and Cognition*, Cambridge University Press.
- Jones, Michael Allan (1996) *Foundations of French Syntax*, Cambridge University Press.
- Kayne Richard S. (1975) *French Syntax*, The MIT Press.
- (1984) *Connectedness and Binary Branching*, Foris Publications.
- Kuroda, S.-Y. (1972) "The Categorical and the Thetic Judgement: Evidence from Japanese Syntax", *Foundations of Language* 9-2, 153-185.
- Menshing, Guido (2000) *Infinitive Constructions with Specified Subjects: A Syntactic Analysis of the Romance Languages*, Oxford University Press.
- (2017) "Infinitival Clauses", in Dufter, Andreas & Elisabeth Stark (eds.) *Manual of Romance Morphosyntax and Syntax*, De Gruyter, 369-396.

*32 Ueno (2019) では、*credere* の再構造化 (restructuring) について考察を行っている。

- Montrul, Silvina A. (1998) "The L2 Acquisition of Dative Experiencer Subjects", *Second Language Research* 14-1, 27-61.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, The MIT Press.
- Roberts, Ian (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press.
- Rooryck, Johan (1997) "On the Interaction between Raising and Focus in Sentential Complementation", *Studia Linguistica* 51 (1), 1-49.
- Ruwet, Nicolas (1982) *Grammaire des insultes et autres études*, Éditions du Seuil.
- Sabatini, Francesco & Vittorio Coletti (1997) *DISC Dizionario Italiano Sabatini Coletti*, Giunti.
- Safir, Kenneth J. (1985) *Syntactic Chains*, Cambridge University Press.
- Sportiche, Dominique (1996) "Clitic Constructions", in Rooryck, Johan & Laurie Zaring (eds.) *Phrase Structure and the Lexicon*, Kluwer Academic Publishers, 213-276.
- Torrego, Esther (2002) "Arguments for a Derivational Approach to Syntactic Relations Based on Clitics", in Epstein, Samuel David & T. Daniel Seely (eds.) *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, Blackwell, 249-268.
- Ueno, Takafumi (2019) "The Diachronic Shift of Embedded Clauses: Restructuring of the Control Verb *credere*," *Nidaba* 48, 3-12.
- 上野貴史 (2014) 「小節構造における不定詞補部：再構造化構文における *di*-INF と ϕ -INF」, 『言語文化学会論集』第 43 号, 3-17.
- (2015) 「イタリア語非対格自動詞補文の使用分布と統語構造」, 『広島大学大学院文学研究科論集』第 75 卷, 43-60.
- (2018) 「イタリア語非対格動詞における補文の通時的変遷：古イタリア語の小節構造」, 『イタリア学会誌』第 68 号, 73-94.
- (2019) 「イタリア語繰り上げ動詞・非対格動詞における基底構造の通時的変化：小節構造分析における再述接語と虚辞代名詞」, 『歴史言語学』第 8 号, 1-40.
- (2020a) 「名詞述語文の小節構造分析：英語・イタリア語・フランス語の場合」, 『ニダバ』第 49 号, 11-20.
- (2020b) 「フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における属詞構文：数量的分析から見る繫辞性・動詞性」, 『広島大学文学部論集』第 80 号, 45-64.
- (2021) 「イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における自動詞用法：その派生と繫辞性」, 『ニダバ』第 50 号, 1-15.
- 中本武志 (2013) 「三つの与格」, 『フランス語をとらえる：フランス語学の諸問題 IV』, 東京外国語大学グループ《セメイオン》, 三修社, 125-137.